

チベット歴史物語『王統明鏡史』第17章における仏身論

谷口 富士夫

Buddhakāya Theory in the 17th Chapter of the *rGyal rab gsal ba'i me long*

Fujio TANIGUCHI

抄 録

本稿は、吐蕃王国時代のチベットについての歴史物語である『王統明鏡史』第17章に説かれる仏教教義のうち、特に仏身論に着目して、大乘仏教正統派教義の仏身論との関係を探りながら、その特徴を明らかにすることを目的とする。

具体的には、第17章に見られる仏身論関連の語「三身」「法身」「受用身」「変化身」「変化」の用例を、法身を中心とした顕教正統派の三身説、十一面観音像と三身説との関連づけ、個性を持った尊格の化身、という3パターンに分けて分析する。

キーワード：『王統明鏡史』、仏身論、ソンツェン・ガンポ王、十一面観音、チベット

はじめに

本稿は、吐蕃王国時代のチベットについての歴史物語である『王統明鏡史』第17章に説かれる仏教教義のうち、特に仏身論¹に着目して、大乘仏教正統派教義の仏身論との関係を探りながら、その特徴を明らかにすることを目的とする。

本稿で扱う『王統明鏡史』(*rGyal rab gsal ba'i me long*)は、観音によるチベットの教化という物語の形式で、チベットの建国王ソンツェン・ガンポ (Srong btsan sgam po) の生涯と仏教の伝来を中心に、吐蕃王国の時代——仏教史の観点から言えばいわゆる前伝期 (snga dar) の初期——について述べた歴史物語である。あくまでも歴史物語であるから必ずしも史実を述べているわけではなく、ソンツェン・ガンポ王が聖観音菩薩²そのものであるという信仰の立場から物語が進められている。本書は14世紀後半、より具体的には1369年までにサキャ派の学匠ソナム・ギェルツェン (bSod nams rgyal mtshan, 1312-1375)³によって著されたと考えられている⁴。そうであれば、本書に説かれる仏教教義はサキャ派の教義から大きくは外れていないものと思われる⁵。

1. 『王統明鏡史』における観音の位置付け

本書の第17章は章題を「王ご夫妻⁶の行いが完成して、自生の十一面(観音像)の心臓部に消えたことについて」(rgyal po yab yum gyi mdzad pa yongs su rdzogs te/ rang byon bcu gcig zhal gyi thugs kar thim pa'i skor) とするよう、チベット臣民にとっての父君である

ソンツェン・ガンポ王と母君である二人の王妃がこの世から姿を消す場面を舞台とし、王が王子や大臣たちに仏教の教えを説く場面が主要な内容となっている。

本書では二つの観音が重要な役割を占める。一つは、王その人の姿をとった観音である。これについては本書の第9章「聖観音の身から四条の光が放たれ、そこから法王が誕生なされたことについて」(phags pa spyan ras gzigs kyi sku la 'od zer bzhi 'phros pa las/ chos rgyal 'khrungs pa'i skor)の中で次のように、後のソンツェン・ガンポ王が誕生する場面が描かれる。

また(観音の)心臓部から一条の光が放たれて、チベット(有雪国)に至った。チベット全土が光に包まれた。……そこで九ヶ月と十日たつと、とりわけ神々しいご子息が丁丑(ひのとうし)の年にチャンパ・ミンギェルリン宮殿で誕生した。頭には阿弥陀仏(sangs rgyas a mi de ba)がいらっしゃり、手足には[法]輪の相があり、髪は碧色で誕生したのである。諸仏が加護し、諸菩薩が祝福を述べ、神々が華の雨を降らせて、大地も六通りに揺れた。

さて、その見え方は三種であった。十方の諸仏への顕現には、聖観音が宿願の力によってチベットの衆生たちを成熟、解脱させて、辺境のこの地が、暗闇のなかで燈火をともしたかのようになって、宝石の国土になったのをご覧になった。(修行階梯上の)十地の諸菩薩への顕現には、聖観音が、辺境のチベットの衆生たちを仏法に入れるために変化の王(sprul pa'i rgyal po)に身を変じて、しかるべき教化方法で衆生の利益を行うように見えた。凡俗の人への顕現には、無比なる稀有な王子が誕生したと見えた⁷。

この記述から理解できるように、本書の主人公であるソンツェン・ガンポ王は通常の人間の目には王家の人間として見えるものの、真実を見る能力のある仏菩薩には、王の本体が観音であることが見えているのである。

以上がいれば生きている観音であるのに対して、もう一つの観音は、寺院建立にともなって自然にできあがった自生の十一面観音像である。ただし日本で一般的な十一面観音像とは大きく異なり、図像の特徴はむしろ「千手観音像」と呼ぶべき内容になっている⁸。その図像的、かつ仏教教義的特徴は本書の第14章に詳細に記述されているが、本稿で扱う第17章にもそれを受けた記述があるので、内容については後述することとした。

ただし観音についての神話は文献によって色々とあるが、いずれのばあいも観音菩薩は文字通りに「菩薩」であって「仏」ではない。つまり、本来ならば「仏身論」で考察すべき対象ではないことを押さえておく必要がある。

2. 三身説

「仏」(buddha、「めざめる」を意味する動詞語根√budhの過去分詞形)は、仏教史の最初期には修行完成者を意味する普通名詞にすぎなかったが、教団の発展および大乘仏教の展開とともに、仏教の宇宙観の中で様々な側面を持つ最高存在として術語化した。比較的早い段階では仏を、真理そのものである「法身」(dharmakāya)と、姿形を持つ「色身」(rūpakāya)の二身で説明することが多かった。

時代が下ると仏の位相を3種に分ける三身説が説かれるようになる。『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrāṅkāra)では、(1)法身(dharmakāya, chos sku)または自性身(svabhāvakāya, ngo bo nyid sku)、(2)受用身(saṃbhogakāya, longs spyod sku)、(3)

変化身 (nirmāṇakāya, sprul sku) の三身説として仏身論が整理されて提示されるようになる。そして、それが仏身論のスタンダードとなり、三身説以外の説を立てる場合でもその三身を前提とすることとなった。また時に例外はあるものの、たいていの場合、三身への言及は法身から始まり、ついで受用身、最後に変化身へと続いている。

また文献によって細かい差異はあるものの、一般に法身または自性身は仏にしか見ることができず、受用身は初地以上に修行の進んだ菩薩でないとも見ることができず、一般の凡夫は変化身しか見ることができないとされる。

他方、三身説以外で有力なのは、たとえば、日本の法相宗の所依の論書である『成唯識論』が受用身を自受用身と他受用身の二つに分けて実質的に四身とする説や、密教において法身を理法身と智法身の二つに分けてやはり実質的に四身とする説などである。それらと軌を一にするのが、『大乘莊嚴經論』に少し遅れて成立したと考えられる『現觀莊嚴論』(Abhisamayālaṅkāra) に対してハリバドラ (Haribhadra, 8世紀後半) が著した註釈書の中で紹介される説である。それによると、「自性身」と「法身」は同義語ではなく、それぞれ別の「身」を表す。そして事実上、「自性身」が理法身を指し、「法身」が智法身を指すこととなる。そして彼以降のインド・チベットでは、『現觀莊嚴論』の仏身論は法身と自性身を同一とするか別とするかが大きな論争となった⁹。また、ハリバドラよりさらに時代がくだると、特に密教系では五身以上の「身」を説く文献も現れてくる¹⁰。

いずれにせよ、本稿で扱う『王統明鏡史』第17章は明確に「三身」(sku gsum) という語を用いるとともに、「自性身」という語を用いることはない。

3. 『王統明鏡史』第17章における仏身論

ここからは第17章における仏身論に関係する用語を、法身を中心とした顕教正統派の三身説、十一面観音像と三身説との関連づけ、個性を持った尊格の化身、という3パターンに分けて見ていくこととする。

a. 法身を中心とした顕教正統派の三身説

『王統明鏡史』は明確に三身説を採用し、「三身」(sku gsum) という語を用い、仏身に関して「四身」その他の数が述べられることはない。

第17章にはその「三身」の使用例が2回見られる。一つは、ソンツェン・ガンボ王に対してクンソン・クンツェン王子¹¹が教えを請う韻文体の最後に現れる。

e ma ho//
 sangs rgyas kun gyi 'phrin las//
 snang ba mtha' yas kyi thugs rje//
 bde ba can kyi pho nya//
 bod 'bangs yongs kyi skyabs gnas//
 ……
 ma bcos ngang nas bstan nas kyang//
 byar med ngang gis gnas pa la//
sku gsum shugs las 'char ba yi//
 bdag cag blo la sbyar du gsol// (GSM p.207)

おお、

一切諸仏の働きよ。

無量光 (= 阿弥陀仏) の慈悲よ。

極楽の使者よ。

チベットの民すべての帰依の対象よ。

(略)

(深遠な教えを) 偽りのない状態で示してからも、

作為のない状態で留まっているところに

三身が自ずと現れるさまを

私たちの意に結びつけてください (= 私たちに理解させてください)¹²。

観音そのものであるソツェン・ガンポ王が阿弥陀仏の慈悲によって極楽世界から送られた使者であり、仏の働きであると呼びかけた後に、王子は「三身」と結びつけて王に教えを請う。三身の具体的な内容について王子自体はこれ以上何も語っていない。

この後、王子の請願に応じてソツェン・ガンポ王が韻文と散文で教えを説く。その散文の中でもう1例の「三身」が見られる。

……byed spyod chos spyod du 'gro/ mthong thos **sku gsum** du byon/ ye shes nang nas brtol/ nyon mongs kun rang sar dag/ dad gus rang la tshud do/ 'khor 'das kyi rtsa ba rang rig tu shes/ skyid sdug gsal 'debs su shes/ bdag 'dzin **chos skur** grol lo/ gzhi mthong bas lta ba med/ rtsad chod pas sgom du med/ rang sa zin pas sgrub tu med/ rang sems ngo shes pas sangs rgyas med do/ shes rab rang brdol du byon pas/ wal bo brjed med du 'dug pa/ sna tshogs 'gag med du grol ba/ tshor ba rjes med du sangs pas/ rig pa glan sar chags pas/ **chos sku** gcer mthong du grol ba/ rig pa rkyang ded du 'dug pas gnyis su med pa'i sku/ rang snang chen po'i ngang la lus so/ rang byung du yin pas lhun grub tu byung/ rang gsal yin pas gting gsal du shar/ rang snang yin pas 'od gsal du snang/ rang rig yin pas **chos skur** byung/ ran grol yin pas zangs thal¹³ du byung ngo/ (GSM pp.214-215)

(前略) 行う行為が法の行為になり、見たり聞いたり三身として現れる。智慧が内部から現れる。あらゆる煩惱が自らの地において清浄になり、崇信が自らに差し込むのである。輪廻と涅槃の根本は自己認識であると知り、快不快は明瞭な想起であると知る。我執は法身として解放される。基体が(おのずと)見えるから(わざわざ現象を)見ることはない。追及しきったから(改めて)修習することはない。自らの地を把握したから(改めて)成就することはない。自らの心を認知したから(改めて)悟って仏になることはない。般若の知恵が自ずから湧き出るから、はっきりと忘れることがないままにいる。様々なものが滅することなく解放される。感受作用が跡もなく目ざめることによって、認識が修復の地に付着するから、法身があるのまに見えるものとして解放される。認識のみになっているから不二の身であり、自らの大いなる輝きの状態に残される。自生しているから自然成就して(無功用に)現れた。自ら明澄であるから底まで明澄に現れる。自ら輝いているから光輝に輝く。自己認識であるから法身が生じた。自ら解放されたので、真っ直ぐになった。

仏法を実践するのに何か特殊な行為が必要なのではないという訓戒の中で「三身」の語が現れている。その後、三身の具体的な内容として、法身・受用身・変化身という3つに言及があるわけではなく、法身のみ3回の言及がある。この点から判断すると、「三身」と言いながら、その代表は法身のみである可能性がある。

しかし無論、「法身」「受用身」「変化身」がセットとして扱われる用例も少なくない。三身のそれぞれについて定義のようなものを述べる段では次のように説かれている。

du ma ngo bo gcig pa la//
chos sku ming du btags pa yin//
 dag snang lha ru snang ba la//
longs sku ming du btags pa yin//
 sna tshogs thabs kyis 'dren pa la//
sprul sku ming du btags pa yin// (GSM p.210)
 多のものが本質は同一であることを
 法身と名づけたのである。
 清浄な顕現が神として顕現したものを
 受用身と名づけたのである。
 様々な方便によって引導するものを
 変化身と名づけたのである。

同様の例は他にもある。

sna tshogs 'dzin bral chos sku yin//
 ma 'gags gsal ba longs sku yin//
 sna tshogs bral ba sprul sku yin//
 tha mal rtog med chos sku yin//
 chos nyid 'dod pa tha mal yin// (GSM p.213)
 様々なものの執着（取）を離れたのが法身である。
 さえぎられず明澄なのが受用身である。
 様々なものを離れたのが変化身である。
 凡俗の分別のないのが法身¹⁴である。
 法性を望むのが凡俗である。

詳細な説明がないものの、これら二つの例は、基本的に顕教正統派の仏身論に準じた説明とみなすことができる。

b. 十一面観音像と三身説との関連づけ

本書には、自生の十一面観音像に関して三身を割り当てる記述がある。

chos sku stong pa'i ngang nyid las//
 'gro ba'i don du bzhengs pa'i sku//

zhi ba'i zhal bzhi khro zhal bdun//
 bcu gcig zhal la phyag 'tshal lo//
 rtsa ba'i zhi zhal dkar po gsum//
 rab tu 'dzum zhing mdzes pa//
 las dang nyon mongs zhi mdzad pa//
chos sku'i zhal la phyag 'tshal lo//
 de steng btso ma gser mdog can//
 rngams pa'i zhal gsum bzhad pa'i dpal//
 tshe dang bsod nams dpal 'byor gsum//
 rgyas par mdzad la phyag 'tshal lo//
 de steng byi ru ltar dmar ba'i//
 dbang gi las mdzad zhal gnyis po//
 rnam par gtsigs pa'i khro gnyer can//
longs sku'i zhal la phyag 'tshal lo//
 de steng drag po'i las mdzad pa//
 dud sprin mdog 'dra zhal gnyis po//
 'jigs shing rngams pa'i spyen gsum bgrad//
sprul sku'i zhal la phyags 'tshal lo//
 de steng bla ma sprul ba'i sku//
 sangs rgyas kun 'dus li khri'i mdog//
 'od dpag med mgon rgyal ba yi//
 gtsug rgyan can la phyags 'tshal lo// (GSM pp.225-226)

法身は空なる状態であるが、
 衆生のために建立された
 寂靜の4つのお顔と忿怒の7つという
 十一面の身 (= 観音像) に礼拝いたします。
 根本の白い寂靜の3つのお顔は
 微笑みをたたえて優雅で、
 業と煩惱を鎮めなさる。
 法身の (根本の3つの) お顔に礼拝します。
 その (根本の3つのお顔の) 上には純金色の
 忿怒の3つのお顔が呵々大笑の栄えがあり、
 寿命と福德と財産の3つを
 増大させる。(その忿怒の3つのお顔) に礼拝します。
 その (忿怒の3つのお顔) の上には、珊瑚のように赤く
 敬愛のわざをなさる2つのお顔が
 牙をむきだした忿怒のすがたを持った
 受用身のお顔に礼拝します。
 その上には、調伏のわざをなさり、
 煙雲のような色の2つのお顔が
 恐ろしい怒りの3眼を見開いた

変化身のお顔に礼拝します。

その上に、師匠たる変化の身であり、

一切諸仏が集まった、朱色の、

無量光なる守護者の勝者（＝阿弥陀仏）の

頭頂の飾りを持つ（姿）に礼拝します。

ここでは法身・受用身・変化身それぞれに8行（パーダ）ずつ費やして、十一面観音像の顔それぞれを仏身に割り当てている。法身は十一面観音像全体であるとともに、最下段にある柔和な三面に相当し、受用身は下から2段目の忿怒の三面と3段目の忿怒の二面の計五面に相当し、変化身はその上の忿怒の二面と最上段の阿弥陀仏の計三面に相当することが説かれている。

また、以上の記述から少し後に、変化身に属する千手を除く計四十八手の持物が何であるかについて述べた後、十一面観音像の千あまりの手を仏身に割り当てる記述がある。

chos sku'i rtsa phyag rnam pa bcu//

longs sku'i yan lag sum cu brgyad//

sprul sku'i nyin lag stong mnga' ba'i//

nam mkha'i rgyal po khyod la 'dud// (GSM pp.227-228)

法身の根本の十本の御手、

受用身の従たる三十八本、

変化身のさらに従たる千本をお持ちの

虚空王（＝観音）たるあなたに敬礼します。

十一面観音像の手と仏身を結びつける、同様な説明は第14章にも先だって見られる¹⁵。これらの説明が顕教正統派の仏身論と基調が異なることは、容易に理解できよう。

通常のはあい、法身は色身と異なって姿形を持たない、法（＝真理）そのものを擬人化した仏身であるから、色身に分類される受用身や変化身の像ならあり得るものの、本来なら法身を造形化して仏像にすることはあり得ないはずである。にもかかわらず、実際には自生の十一面観音像と関連づけた説明がなされるので、「法身は空なる状態であるが」という冒頭の前置きがなされたものと考えられる。その限定を受けつつも、顔にしても手にしても法身に関連づけられる「根本」から、ついで受用身、最後に変化身という順序で末端に広がっていくのが確認できる。

さらに、上の記述の特異性を指摘するとすれば、菩薩であって仏ではない観音も「仏」身論の枠組みで捉えられていることがある。また、別々の像を三身ごとに割り当ててのではなく、一つの像の部分ごとに三身が割り当てられていることも注目に値する。

c. 個性を持った尊格の化身

見出しには「化身」としたが、原語は「変化身」（sprul sku, sprul pa'i sku）の前半部分の"sprul pa"のみのことが多いので、以下は"sprul pa"のみの場合は「変化」と訳す。

さて『王統明鏡史』第17章には、三身説とは直接関係づけられない形で、特定の尊格の「変化」がしばしば説かれる。たいていの場合、仏ではなく菩薩が現実の人間世界に史的人物の姿を現す場面での用法である。

nga nas gdung rabs lnga pa la//
 'jam dpal dbyangs kyi **sprul pa** ste//
 rgyal po sde zhes bya ba 'byung//
 des kyang dam chos rgyas par byed//
 de nas gdung rabs gnyis pa la//
 phyag na rdo rje'i **sprul pa** ste//
 rgyal po khri zhes bya ba 'byung//
 des kyang dam chos rgyas par byed//
 de nas bdud kyi **sprul pa** ste//
 rgyal po dud 'gro'i min can 'byung// (GSM p.222)

私から5代目に

文殊の**変化**にして

「デ」という王が現れるだろう。

彼も正法を広めるだろう。

彼から2代目に

金剛手の**変化**にして、

「ティ」という王が現れるだろう。

彼も正法を広めるだろう。

それから悪魔の**変化**にして、

畜生の名を持つ(「ラン(牛)」という)王が現れるだろう。

ここでは予言の中で、ティソン・デツェンを指すと思われる人物が文殊菩薩の**変化**であり、ティデ・ソンツェンを指すと思われる人物が金剛手菩薩の**変化**であり、ラン・ダルマを指すと思われる人物が悪魔(bdud)の**変化**であるとされている。伝承ではラン・ダルマ王は破仏を行った人物とされるから「悪魔の**変化**」と指摘されたのであろうが、このように「**変化**」は、必ずしも三身説などにおける**変化**身を指すわけではない。

似たような用法は、王と二人の王妃に関しても見られる。

yab yum gsum **sprul pa'i skur** 'dug pa la/ bzhugs pa'i dus mos gus chung 'dug ces smra zhin yod pa la/ ……rgyal po yab yum **sprul pa'i skur** 'dug pa la/ yab yum gsum kha rang byon bcu gcig zhal gyi thugs kar thim nas bzhud do zer nas ngus pas/……der blon po thon mis rgyal po **sprul pa'i skur** 'dug pa'i rgyu mtshan/……sogs pa bshad pas/ der thams cad yid ches te/ 'phags pa spyen ras gzigs dngos yin par 'dug pa yab yum gsum bzhugs pa'i dus su mos gus chung 'dug zer te/ chos rgyal **sprul pa'i sku** zer zhing thams cad mya ngan gyis sa la 'gyel lo// (GSM pp.231-232)

「(ソンツェン・ガンボ王と二人の王妃の)お三方は**変化の身**でいらしたのに、(私たちは)ご存命の時に尊崇の気持ち小さかった」と述べていたところ、(略)「王らお三方は**変化の身**でいらしたが、お三方とも自生の十一面(観音像)の心臓部に溶けてしまわれた」と述べて泣いたので、(略)そこでトンミ大臣が、王が**変化の身**である証拠…を説明したところ、それを皆が信じて「(王は)聖観音自身であった。(私たちは)お三方がご存命の時に尊崇の気持ち小さかった」と述べて、「**変化の身の法王様**」と言いつつ皆が悲しみで

地に伏せたのであった。

この箇所では、ソンツェン・ガンポ王が聖観音の変化身であることが明示されているが、二人の王妃が何の尊格の変化身であるかは述べられていない。しかし他の箇所でも、ネパール妃のティツンがブリクティ（*bhr̥kṣṭi, jo mo khro gnyer can*）の変化身、中国妃の文成公主がターラー（*tārā, rje btsun sgrol ma*）の変化身であることが暗示されている¹⁶。

さて、先の予言の中の用例では、悪魔の変化も含まれていたため「変化」とのみあって、「変化身」とされていなかったが、ここでの用例はすべて菩薩に関するものばかりなので「変化の身」と明示されている。

同じような文脈におけるもう一つの例を見よう。第17章の結びの韻文である。

de ltar **sprul pa'i** chos rgyal chen po de//
 dgung lo bdun cu tham pa rgyal sa bzung//
 lha khang bzhengs shing dam chos rgyas par mdzad//
 dkon mchog zhabs tog bka' khrim chos la bsgyur//
 ……
 sangs rgyas mi ru **sprul pa'i** 'gro don can//
 spyan ras gzigs dang gnyis su med pa'i sras//
 sdig can chos la 'khod pa'i thugs rje can//
 mtha' yas sems can rnams kyi mgon gcig po//
 chos rgyal **sprul pa'i sku** la skyabs su mchi// (GSM p.234)

以上のように**変化**の偉大な法王は

70年間王位を保ち、

寺院を建立して正法を広めなさり、

（仏法僧の三）宝に奉仕して、（仏）法を政に取り入れた。

（略）

仏が人に**変化**して衆生利益をし、

観音と不二なる（＝異なる）御子息

罪人を（仏）法に据える慈悲者、

無限の衆生たちの唯一の守護者、

法王という**変化の身**に帰依いたします。

ここではソンツェン・ガンポ王について述べているので、その「変化」の本体は聖観音であるはずだが、「仏（*sangs rgyas*）が人に**変化**して衆生利益をし」と述べて、本体が仏であるという記述も見られる。さらに「観音と不二なる（＝異なる）御子息」という一節における「御子息（*sras*）」が、父である仏（阿弥陀仏か？）に対して、観音と不二なる王は菩薩という子息であるというニュアンスを持っているようにも考えられる。そうであれば、先に、クンソン・クンツェン王子から、観音そのものであるソンツェン・ガンポ王が阿弥陀仏の慈悲によって極楽世界から送られた使者であり、仏の働きであると呼びかけられたことを指摘したが、菩薩は仏の働きであるという思想が背後にあるのかもしれない。

まとめ

以上、『王統明鏡史』第17章における仏身論関係の用例をみてきた。その特徴は次のようにまとめられるだろう。

- ① 基本的に三身説をとっている。
- ② 顕教正統派の仏身論に準じた箇所では、法身が三身を総括していると思われる用例が認められる。
- ③ 十一面観音像と仏身を関連づける箇所では、菩薩であって仏ではない観音が「仏」身論の枠組みで捉えられている。また、三身が別個の三体の像と関連づけられるのではなく、一つの像の部分ごとに割り当てられている。そして特異ではあるが、本来形を持たないはずの法身も観音像の部分と関連づけられていて、「根本」である法身から受用身、最後に変化身という順序で末端に広がっていくのが確認できる。
- ④ 文殊菩薩や観音菩薩など個性を持った尊格と、歴史上の人物とを関連づける箇所では、史的人物が菩薩などの変化身として位置づけられるとともに、それも仏の変化であると位置づけられている。

顕教正統派の教義を展開したと言うよりは民間信仰を教義のなかに位置づけたと思われる③と④もまた、②のように法身が三身を総括しているという思想の表れの一つであるように思われる。

注

- 1 『王統明鏡史』が仏身論を前提とした文献であることは、本書第2章の章題「釈迦牟尼仏の三身の建立と開眼供養について」に「三身」(sku gsum) という語が用いられていることから明らかである。
- 2 近現代の研究では、多面多臂であることの多い密教の「変化観音」と区別して、そうではない一面二臂の姿の観音を「聖観音」と呼ぶ(佐久間 2015 p.ii)。しかし『王統明鏡史』において「聖観音」と呼ぶとき、それは六字観音(佐久間 2015 pp.193-204)を指している。
- 3 次注に示すようにこの人物がサキヤ派本流の人物であるのならば、1343-1346の3年間、サキヤ派の座首を務めている(立川 1974 p.95注8)。また、この人物は「新サキヤ派」(Sa skya gsar ma)の重要人物で、サキヤ本家に代わって活躍するゴル派(Ngor)やゾン派(rDzong)へ伝統をつないでいる(立川 1989 p.160)。
- 4 ただし今枝(2015 pp.382-383)によると、この著者が、サキヤ派宗家のクン氏(またはコン氏、'Khon)の系譜に連なり、サムイエ寺を再建した学僧と同一人物であるかは、その著作リストに本書『王統明鏡史』が記されていないことから、疑問視されている。なお、著作年代については山口(1983 pp.74-78)に依った。
- 5 本書第1章の末尾に、参考文献として「プトン・リンポチェの“仏教史”や、法主プトンのご意見と一致しているから法王ラマの著作の“彰所知論”(Shes bya rab gsal)を詳しくご覧あれ」と述べている。ここは必ずしも仏教教義について述べている文脈ではないが、サキヤ派所属ではないが思想的にサキヤ派に近いとされるプトン(Bu ston Rin chen grub, 1290-1364)や、サキヤ派本流で元のフビライ帝の帝師になったバクパ(Phags pa Blo gros rgyal mtshan, 八思巴, 1235-1280)の著書に言及していることから、上記注3のような問題が残っているとしても、ソナム・ギェルツェンがサキヤ派正統派の教義に従っている蓋然性の高さを示すものと思われる。
- 6 "yab"は「父」の尊敬語、"yum"は「母」の尊敬語であるので、逐語的に訳せば「王ご父母」となるのであろうが、チベット臣民にとっての父母である王と王妃を指しており、父母に対する子の立場はあまり主題と関係がないので、ここでは「ご夫婦」と訳した。
- 7 GSM pp.79-80.
- 8 実際には一千四十八手が説かれているので、千手観音であるわけでもない。なお日本での千手観音の造形では四十手ないし四十二手で代表することが多いが(佐久間 2015 pp.71-105)、かりにそれに千手を加えても、『王統明鏡史』での記述と数が異なる。また十一面の造形の仕方、日本での造形と『王統明鏡史』での記述は大きく異なる。

- 9 筆者自身は谷口（1988）において、『現観莊嚴論』における仏身論は三身説を基盤としているが、「法身」には三身のうちの「自性身」と同義語として用いられる例と、三身を総称した例の2種類の用法が認められることを指摘したことがある。
- 10 谷口 2018.
- 11 今枝（2015 pp.282, 351）は、文脈から判断して、孫のマンソン・マンツェン王子の誤りであろうとする。
- 12 この箇所は韻文で書かれていて格関係の省略が多いため、意味を取りにくい。他の訳は次の通りである。なお訳文中の“/”は改行を示す。
- 浅井万友美訳：あるがままの状態で示し、さらに／無作為の境地から／三身が自ずと現れるさまを／私たちに解るようにお教えください。（今枝 2015 p.283）
- Sørensen訳：And yet even after [you] have demonstrated [this] in a genuine fashion./ Pray, [I] beg [you] to indulcate [this] in our mind (blo la sbyar) / Which has risen out of the power of the three bodies./ Residing [itself] in a state of inactivity (byar med) . (Sørensen 1994 p.316)
- Taylor & Lama Choedak Yuthok訳：Having shown the uncontrived nature./ While dwelling in the nature of inactivity?/ Yet manifesting through the power of the three forms./ May you instil vigour in our minds. (Taylor & Lama Choedak Yuthok 1996 p.198)
- 13 "zang thal"に訂正して読む。
- 14 ここでは「法身」(chos sku) が再出するが、文脈から判断して、「法性」(chos nyid) の誤りである可能性がある。
- 15 GSM pp.169-171.
- 16 GSM pp.224-225.

参考文献

- GSM: *Rgyal rabs gsal ba'i me long*. 北京：民族出版社。
- 星泉 2016 『古典チベット語文法 - 『王統明鏡史』(14世紀)に基づいて-』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 今枝由郎（監訳）2015 『チベット仏教王伝 - ソンツェン・ガンボ物語-』岩波文庫。
- Kuznetsov, B.I. (ed.) 1966 *Rgyal rabs gsal ba'i me long (The Clear Mirror of Royal Genealogies)*. Leiden: E.J. Brill.
- 佐久間留理子 2015 『観音菩薩 - 変幻自在な姿をとる救済者-』春秋社。
- Sørensen, Per K. 1994 *The Mirror Illuminating the Royal Genealogies: Tibetan Buddhist Historiography. An Annotated Translation of the XIVth Century Tibetan Chronicle: rGyal-rabs gSal-ba'i Me-long*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- 立川武蔵 1974 『西藏仏教宗義研究 第1巻 サキャ派の章』東洋文庫。
- 1989 「サキャ派」長尾雅人編『岩波講座東洋思想 第11巻 チベット仏教』岩波書店。
- 谷口富士夫 1988 「『現観莊嚴論』における法身」『日本仏教学会年報』53：61-74。
- 1999 「チベット密教の仏身」立川武蔵・頼富本宏（編）『シリーズ密教 2 チベット密教』春秋社：64-77。
- 2018 「『現観莊嚴論』トルボバ註における仏身論」『印度学仏教学研究』67（1）：334-341。
- Taylor, McComas & Lama Choedak Yuthok 1996 *The Clear Mirror: A Traditional Account of Tibet's Golden Age*. Boulder, Colorado: Snow Lion Publication.
- 山口瑞鳳 1983 『吐蕃王国成立史研究』岩波書店。

（本稿は、令和3年度科学研究費補助金基盤研究（B）21H00476（研究代表者：佐久間留理子）による研究成果の一部である。）

